

優 秀 賞

「私と建設業」

東海工業専門学校金山校 土木工学科 1年
三 澤 優 揮

私の父は、建設業界で現場監督をしています。私がまだ小さい頃から、いろいろな場所・現場を転々とし、その現場などに連れて行ってもらうことがありました。記憶が無いくらい小さな時のことでもあるので、写真で父の現場を見ることもあります。とても大きなダンプトラックやブルドーザ、大きくて広い作業現場を初めて見た時、とても興奮した事を今でも覚えています。そんな父の背中を見て来て、私も建設業界で働きたいと小さいながらに思っていました。

とは言うものの私は、一度高校卒業後に地元の工場へ就職しました。そこでは、板金溶接の現場で作業していました。普通に働き、それなりの給料を貰い、休みはしっかりある。そんな何気ない日々を送っていましたが、仕事は、いつもほぼ同じ作業を繰り返すだけで、刺激がなく、やりがいもよく分からなくなりました。そんな時に、小さいとき父の現場を見た時の記憶が頭の中で浮かびました。地図に残り、人の役に立つモノづくりをしたいと改めて思い、専門学校に入学し資格を取得して、建設業界に入りたいと決意しました。

そんな建設業界は、いま高齢化が進み、新入社員の定着率が悪いと聞きます。そして、昔から3K(きつい・きつい・きつい)というイメージがあり、世間的には、あまり良いように見られていないのが現実です。

新しい人がいない問題として、もちろん作業する人がいないのは当たり前ですが、日本の企業が昔から培ってきた技術力が次の世代に受け継がれないという事が問題なのではないかと思っています。日本の高度経済成長期からのバブル時代と呼ばれる時代には、公共工事の仕事がとても多く、それに伴い技術力もたくさんの企業がそれぞれ色々な分野で成長させることができた時代だったと思います。そこで高めた日本の技術力を受け継いでいきたいと思っています。

定着率とともに、シンプルな人手不足も大きな問題となっております。先の問題よりもこちらの方が、深刻な問題かもしれません。土木業は、身近にあります。それ故に意外と認知されていないのかなと思います。当たり前前に舗装されている道路、構造物を建てるための基礎など本当に身近で無くてはならないものです。それらは、目に見えて成果となり仕事をするうえで、とてもやり甲斐があると思います。

初めに話したように私は、父の仕事現場を見たことで、建設業に興味を持ちました。だから、小さい頃にそのような刺激を多くの人に与えることが重要ではないかと思っています。大手ゼネコンや地域の建設・土木会社が主となって小学校や、中学校の子供たちに実際の現場や、具体的に何をやっているかをアピールして、そこで少しでも建設業界へ興味を持ってもらうことが出来れば良いのではないかと思っています。そのうえで、さっき言ったように建設業界の3Kを払拭しようと今では、国を挙げて様々な問題を解決し良くしようとしていることを発信していくことが大事なのではないかと思っています。いろいろな現状がありますが、まずは、建設業界の認知度を上げる必要があると思います。そして、人々の暮らしには必要不可欠であることも訴えていく必要があると思います。

私は、建設業界に大きな希望を持っています。それは、父が見せてくれた現場や、聞かせてくれたやり甲斐などを知っているからです。実際に、就職をすればなかなか上手いかない事もあるかと思っています。そこで腐らずに、仕事としっかりと向き合っ、胸を張って自分の仕事を紹介できるようになれたらいいなと思います。そして、自分の子供が、私のように、仕事をしている姿を見て、「お父さんはすごい仕事をしているんだ。」と思って貰えるように、頑張っていきたいです。